

## 随想の読解実践

武満徹「影絵の鏡」(東京大)

— 時間 —  
30分

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

私がこれまでに作曲した音楽の量は数時間あまりにすぎない。たぶんそれは、私がひととしての意識を所有しはじめてからの時間の総量に比べれば瞬間ともいえるほどに短い。しかもそのなかで他人にも聴いて欲しいと思える作品は僅か数曲なのである。私は、今日までの全ての時間を、この無にも等しい短い時間のために費やしたのであるか。あるいは、私が過ごした時の大半が、宇宙的時間からすれば無にちかい束の間であり、この、惑星のただ一回の自転のために必要な時間にも充たない数時間の作品と、これからの僅かな時が、ひととしての私を定めるのであろうか、などと考えるのであるが、それは、もうどうでも良いことであり、いずれにせよ私がすることなどはたかが知れたことであり、それだから後ろめたい気分にあえず落ちいることもなしにやっても行けるのだらう、と思うのである。

寒気の未だ去らない信州で、棘のように空へ立つ裸形の樹林を歩き、頂を灰褐色の噴煙にかくした火山のそこかしこに雪を残した黒々とした地表を凝視していると、知的生物として、宇宙そのものと対峙するほどの意識をもつようになった人類も、結局は大きな、眼には感知しえない仕組の内にあるのであり、宇宙の法則の外では一刻として生きることもなるまいと感じられるのである。

生物としての進化の階段を無限に経て、然し人間は何処へ行きつくのであろうか。

八年程前、ハワイ島のキラウエア火山にのぼり、火口に臨むロッジの横長に切られた窓から、私は家族と友人たち、それに数人の泊り客らとぼんやりと外景を眺めていた。日没時の窓の下に見えるものはただ水蒸気に煙る巨大なクレーターであった。朱の太陽が、灰色の厚いフェルトを敷きつめた雲の涯に消えて闇がたちこめると、クレーターはいっそう深く黯い様相をあらわにしてきた。それは、陽のあるうちは気づかずじつじつと地火が、クレーターの遥かな底で星のように輝きはじめたからであった。

誰の仕業であろうか、この地表を穿ちあけられた巨大な火口は、私たちの空想や思考の一切を拒むもののようにであった。それはどのような形容をも排けてしまう絶対の力をもっていた。今ふりかえって、あの沈黙に支配された時空とそのなかに在った自分を考えると、そこでは私のひととしての意識は少しも働きはしなかったのである。しかし私は言いしれぬ力によって突き動かされていた。あの時私の意識が働かなかったのではなく、意識は意識それ自体を超える大いなるものにとらえられていたのであろうと思う。私は意識の彼方からやって来るものに眼と耳を向けていた。私は何かを聴いたし、また見たかも知れないのだが、いまそれを記憶してはいない。

その時、同行していた作曲家のジョン・ケージが私を呼び、かれは微笑しながら nonsense と言った。そして日本語で歌うようにバカライシイと言うのだった。そこに居合せた人々はたぶんごく素直な気持でその言葉を受容していたように思う。

そうなのだ、これはバカライシイことだ。私たちの眼前にあるのは地表にぽかっと空いたひとつの穴にすぎない。それを気むずかしい表情で眺めている私たちはおかしい。人間もおかしければ穴だっておかしい。だが私

を含めて人々はケージの言葉をかならずしも否定的な意味で受けとめたのではなかった。またケージはこの沈黙の劇に註解をくわえようとしたのでもない。周囲の空気にかねはただちよつとした振動をあたえたにすぎない。

昨年暮れから新年にかけて、フランスの学術グループに加わり、インドネシアを旅した。デンパサル（バリ島の中心地）から北西へ四十キロほど離れた小さなヴィレッジへ\*ガムランの演奏を聴きに行った夜のことだ。寺院の庭で幾組かのグループが椰子油を灯してあちこちで一斉に演奏していた。群衆はうたいながら踊りつづけた。私は独特の香料にむせながら、聴こえてくる響きのなかに身を浸した。そこでは聴くということとは困難だ、音の外にあつて特定のグループの演奏する音楽を扱ふことなどはできない。「聴く」ということは（もちろん）だいたいなことには違いないのだが、私たちはともすると記憶や知識の範囲でその行為を意味づけようとしがちなのではないか。ほんとうは、聴くということはそうしたことを超える行為であるはずである。それは音の内在ということと音そのものと化すことなのだろう。

フランスの音楽家たちはエキゾチックなガムランの響きに夢中だった。かれらの感受性にとってそれは途方もない未知の領域から響くものであった。そして驚きのあとに、かれらが示した反応は（これは素晴らしい新資源だ）ということだった。私は現地のインドネシアの人々とも、またフランスの音楽家たちとも異なる反応を示す自分を見出していった。私の生活は、バリ島の人々のごとくには、その音楽と分かちがたく一致することはないだろう。かといってフランスの音楽家のように、その異質の音源を自分たちの音楽表現の論理へ組みこむことにも熱中しえないだろう。

通訳のベルナル・ワヤンが寺院の隣の庭で、影絵が演じられているというので、踊る人々をぬけて石の門をくぐった。急に天が低く感じられたのは、夜の暗さのなかで星が砂礫のように降りしきって見えたからであつた。庭の一隅の、そこだけはなおいつそ夜の気配の濃い片隅で影絵は演じられていた。奇異なことに一本の蠟燭すら点されていない。影絵は精緻に切抜かれた型をスクリーンに映して宗教的な説話を演ずるものである。事実、その後ジャワ島のどの場所でも観た影絵も灯を用いないものはなかつた。私は、演ずる老人のまじかに寄つてゆき、布で張られたスクリーンに眼をこらした。無論なにも見えはしない。老人の側に廻つてみると、かれは地に坐し、組まれた膝の前に置かれた多くの型のなかからひとつあるいはふたつを手にとつては、眩くように説話を語りながらスクリーンへ翳していった。私は通訳のワヤンに訊ねた、老人は何のためにまた誰のために行なっているのか。ワヤンの口を経て老人は、自分自身のためにそして多くの精霊のために星の光を通して宇宙と会話しているのだと応えた。そして何かを、宇宙からこの世界へ返すのだと言つたらいいのだ。たぶん、これもまたバカラシイことかもしれない。だがその時、私は意識の彼方からやってくるものがあるのを感じた。私は何も現われはしない小さなスクリーンを眺めつづけた。そして、やがて何かをそこに見出したように思った。

（武満徹「影絵の鏡」による）

（語注） \*ジョン・ケージ（一九一二～一九九二）アメリカの作曲家。

\*ガムラン II インドネシアの民族音楽。さまざまな銅鑼や鍵盤打楽器で行われる合奏。

\*影絵 II インドネシアの伝統芸能で、人形を用いた影絵芝居。

**問 1**

「私のひととしての意識は少しも働きはしなかったのである」（傍線部ア）とあるが、それはなぜか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×2行 五〇字～六〇字程度）

**問 2**

「周囲の空気にかれはただちよつとした振動をあたえたにすぎない」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×2行 五〇字～六〇字程度）

**問 3**

「かれらが示した反応は（これは素晴らしい新資源だ<sup>ニューリソース</sup>）ということだった」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×2行 五〇字～六〇字程度）

**問 4**

「そして、やがて何かをそこに見出したように思った」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×2行 五〇字～六〇字程度）

**問 1**

--	--

**問 2**

--	--

**問 3**

--	--

**問 4**

--	--